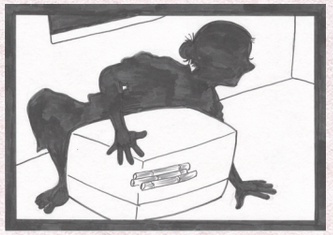
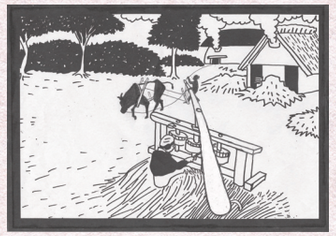




挿絵　福島憲一郎

数年が経過し、帰郷の時がついに訪れました。琉球国行きの船に乗せてもらえることになったのです。

船に乗り込んだ川智が柳行李（旅行用衣装箱）を大事に抱えるのには訳がありました。黒糖が奄美を豊かにすると信じた川智は、危険と知りながらも底を二重にして、三本のキビの苗を忍ばせていたのです。

命がけの渡航を終え、三本の苗とともに無事に故郷にたどり着いた川智は、さっそくこれを人目につかない畑に植えました。

奄美の気候が合うことや川智の熱心な世話により、サトウキビはぐんぐんと成長し、年々畑は広がっていきました。奄美でのサトウキビ栽培、製糖産業の躍進を確信した川智は、子孫代々まで糖業を家業とし、世に伝授するように伝えたとされています。

時代は薩摩藩政へと移りゆき、奄美の民に上納させた黒糖により莫大な財を得た薩摩藩は、倒幕に成功し明治維新へ進みました。島民にとっては苦難の時代でしたが、この黒糖が日本の近代化を可能にしたともいえるでしょう。

そして、奄美のサトウキビ栽培、黒糖製造の礎を築い川智翁のは、この偉業により開饒神社にご祭神として祀られることとなったのです。

※大和村に伝わる言い伝えの一部を脚色したものです。

サトウキビ栽培発祥の地

川智翁が持ち帰った苗を最初に植えたとされるあたりに「きびの郷 磯平パーク」が造られている。「甘蔗創苗の地」の記念碑が園内に建つ。

川智翁ゆかりの地を訪ねる

開饒神社

奄美市街地から車で約 30 分。
役場方面へ向かい尾神山トンネルを抜けてすぐ左にあります。
（大和村思勝 14）

大和まほろば館

奄美黒糖焼酎「開饒」を販売しています。ここでしか味わえないご当地ソフトクリームが大人気。
（大和村大棚 49）

大和浜の群倉

直 川智翁の生家があったとされる場所近くにある伝統的な高床式倉庫群。鹿児島県の文化財に指定されています。
（大和村大和浜 119）

きびの郷　磯平パーク

開饒神社から車で約 20 分。初めてサトウキビの苗が植えられたとされる場所。駐車場下に記念碑あり。足元が悪いのでご注意ください。
（大和村戸円 150-1）

大和村オリジナル体操ソングで 川智翁の偉業を称えて健康増進

すなおにキビキビ体操

〈昔むかしの　大和村
大志をいだく　青年が
琉球国を　目指します
あらしの海に　流されて
着いたところが　異国の地
※きびのふるさと　やまとそん
ここはまほろば　やまとそん

助けられた　かわちくん
お礼に農家で　汗ながし
きび栽培を　学びます
さとうきびに　夢たくし
目指す奄美の　島おこし
※繰り返し

衣装箱に　きびかくし
磯平ばたけに　植えました
島々にそよぐ　きびの波
ひらとみ神社　きびの神
※繰り返し

オール大和村で作成した
「すなおにキビキビ体操」
YouTube で公開中！

サトウキビ栽培の始祖

直川智翁 伝説

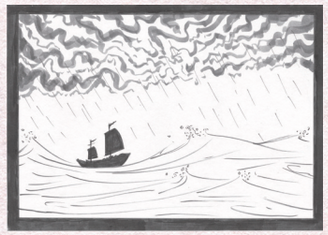
開饒神社に祀られる直 川智翁と
三本のキビの物語

発行　大和村教育委員会・大和村役場企画観光課　〒 894-3192 鹿児島県大島郡大和村大和浜 100 番地
TEL 0997-57-2111　FAX 0997-57-2161　E-mail　kikaku@vill.yamato.lg.jp

南国の照りつける太陽の光を浴びて、そよ風にさらさらと音を立ててたなびくサトウキビ畑。ここ奄美群島で大切に育てられたサトウキビは、黒糖や黒糖焼酎の原料となり奄美群島の産業を支えています。このサトウキビを日本に持ち込んだのが、一説には大和村大和浜集落に生まれた直川智翁※だといわれています。

※老人の男性を敬う敬称

川智翁伝説



これは、大和村に伝わる今から400年余り前の直川智翁と三本のキビのお話です。大和村大和浜の農家に生まれた川智は、生来、農業に熱心な人でした。

江戸時代の初頭、慶長年間（1600年代初頭）に、川智は琉球へ渡航中に台風にあい、遭難してしまいます。運よく中国へ漂着し、九死に一生を得ました。帰郷する機会を待つ間、川智は農作業の手伝いをして日々を過ごしました。

そこで初めて口にした食べ物の一つに黒糖がありました。当時、日本では砂糖はもっぱら中国からの輸入品で、薬として利用される貴重なものでした。そのため、製糖技術を国外に持ち出すことは禁じられていました。

しかし川智は、内密にサトウキビ栽培の方法とサトウキビのしぼり汁から黒糖を作る技術を習得しようと決意します。もとより農業に意欲的な人ですから、故郷の奄美大島でもサトウキビの栽培ができたらと夢を抱いたとしても不思議ではありません。川智はこれまで以上に懸命に働きました。

開饒神社

サトウキビ栽培の始祖 直川智翁を祀る神社。毎年サトウキビ豊作祈願祭を執り行っている。糖業関係者が参拝するほか、初詣には多くの村民が参拝し、広く親しまれる神社となっている。

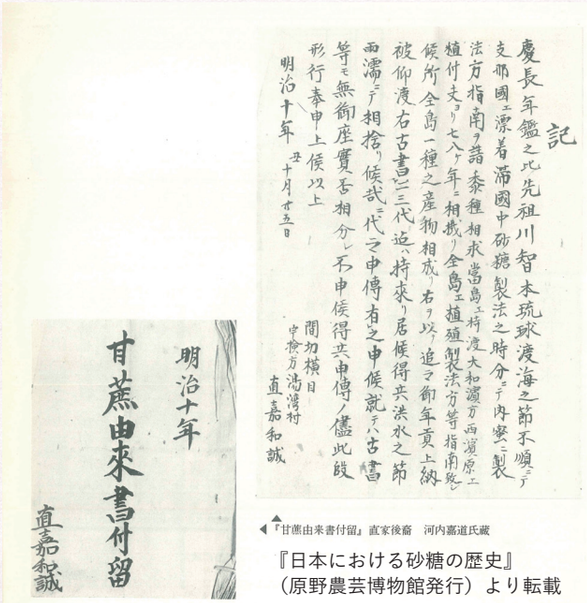
川智翁と子孫の功績

川智翁は帰郷後、農業振興の業績が認められ与人役（現在の村長にあたる）の要職を務めるまでになったといわれています。

川智翁の教えに従い、子孫たちは代々糖業に携わりました。『和家文書』によると、孫の嘉和智は、1691（元禄3）年頃、薩摩藩の命により製糖技術の改良のため琉球に派遣されています。帰島後、黒糖のできもよかったことから、当時の代官から賞状が贈られています。

それから約190年後の1880年（明治13年）、子孫の嘉和誠が、黒糖品評会（全国綿糖共進会）に黒糖を出品した際に、川智翁の先駆者としての業績を伝える『甘蔗由来書付留』を提出しました。それを受けて明治政府は、亡き川智翁の功績をたたえ追賞しました。

これをきっかけに、当時の大島郡長 中村兼志らが川智翁を祀る神社の建立を県知事に請願し、寄附を呼びかけ、開饒神社を建立しました。開饒の「饒」には、豊かであるとの意味があり、奄美群島の産業を開拓し富をもたらした川智翁の偉業を称えています。



明治十年

甘蔗由来書付留

直嘉和誠

記

慶長年間之比先祖川智本琉球渡海之節不順ニテ
支那國ニ漂着滞國中砂糖製法之時分ニテ内密ニ製
法方指南ヲ請奉種相求當島ニ持渡大和濱方西濱原ニ
植付支リ七八ヶ年ニ相成リ全島ニ植殖製法方等指南致
候所全島一種之産物相成リ右ヲ以追々御年貢上納
被仰渡右古書ニ三代迄ハ持來リ居候得共洪水之節
両濡ニテ相捨リ候哉ニ代ヲ申傳有之申候就テハ古書
等モ無御座實否相分レ不申候得共申傳ノ儘此段
形行奉申上候以上
明治十年 十月十五日
間切横目
中筋方 湯湾村
直嘉和誠

『甘蔗由来書付留』直家後裔　河内嘉道氏蔵

『日本における砂糖の歴史』
（原野農芸博物館発行）より転載

『甘蔗由来書付留』

子孫の嘉和誠が提出した『甘蔗由来書付留』には、「先祖の川智が慶長年間に中国に漂着し、内密に砂糖の製造方法を学び、黍を持ち帰って島内に植え付けたと先祖代々言い伝えられている」と書かれています。

正確な年代は特定することができませんが、残された資料から少なくとも直川智翁やその子孫が奄美大島の糖業に早くから携わったことが推察されます。

開饒神社の歩み

1882年（明治15年）
　既存の高千穂神社内に建立
1913年（大正2年）
　高千穂神社と別に奉祀するべく、移転
1961年（昭和36年）
　尾神山のふもとに移転
　川智翁の功労に対する地元有力者の贈位運動により、糖業功労者として従五位が贈られる
1984年（昭和59年）
　建立100周年に合わせ再建
2022年（令和4年）
　建立140周年を迎える

境内にある建立当初の記念碑。碑銘は当時の大島郡長の中村兼志の筆による。

祈願祭

毎年八月末に開催される「ひらとみ祭り」の日に、祈願祭が開催されます。川智翁の伝説に由来し、三本のサトウキビの苗が供えられ、サトウキビの豊作と糖業の安全操業、祭りの安全開催が祈願され、製糖会社、酒造会社などの企業が名を連ねます。

黒糖焼酎「開饒」

川智翁を後世に語り継ぐため、大和村と奄美大島開運酒造が提携し製造する黒糖焼酎。伝統的な常圧蒸留で作られ、世界自然遺産地域に含まれる湯湾岳の伏流水で割ったもの。すっきりとした中にもまろやかさがあると評判です。村内の商店をはじめ、島内で販売されています。奄美大島開運酒造のネット販売でも購入できます。ふるさと納税の返礼品としても人気です。